

イギリスの環境保全活動

ナショナル・トラスト研修ツアーから

門脇 蓉子

一 ナショナル・トラストの他にもさまざまな保全活動

日本で「国民環境基金」という名称で呼ばれることとなったナショナル・トラストは、この一、二年で急速に知られるようになってきた。

三月下旬から一〇日ほど、短い期間であったがこのトラストの出生地イギリスを訪ね、この国の環境保全に関する若干の見聞の機会を得た。この研修ツアーは、(財)観光資源保護財団の企画によるもので、ロンドンとその周辺をバスで巡り、保全されている自然・歴史的資産や、保全の活動現場を観てまわるものであった。

現地では、海外との文化交流にあたっては、ブリテッシュ・カウンセルによって研修プログラムが組まれ、歴史的建造物保存行政(環境省)、シビック・トラスト、ナショナル・トラスト、保全のボランティア、都市研究センターなど、環境保全関係の説明をそれぞれの責任者から聞くことができた。

話は概して、事例的、歴史的なものが多く、なかなか全容のつかみにくいものであった。同行の方の話によれば、この国のチャリティーの精神風土と、慣習法の伝統の故に社会の仕組が、われわれにとって、得体の知れないものに見えるのではないかとということであった。

ともあれ今回のツアーでは、ナショナル・

トラストだけでなく、環境保全にかかわるさまざまなレベルの活動を、垣間見ることができた。貴重な歴史的建造物や文化財、あるいは希少な動植物やすぐれた景勝地は、国民の財産として、政府や地方自治体が保全の責任を負い、行政側が関与しない物については、半官半民のネイチャー・コンサーバシイ・カウンスルや、民間団体であるナショナル・トラストがその役割を負っている。また英国民の生活の中に存在する、一般的な文化財や景勝地に対しては、シビック・トラストやイングランドの田園を守る委員会などが、その任に当たっている。

そしてさまざまな環境保全活動の、原動力となっているボランティアのまとめ役として、ブリテッシュ・トラスト・フオア・コンサベイション・ボランティアーズのような、慈善団体が存在しているのである。

その他に、住民が居住地域の環境改善や、研究活動を行う際の拠点となっている、「都市研究センター」があった。ここで人々は、自分たちの環境を自分たちで考え、改善のためのあらゆる活動を展開している。近年、都市環境教育に力が注がれ、このセンターがその教育の場として利用されている。

このように、独自の領域と役割を持ちつつ相互に関連する、環境保全のための特徴的な諸活動を、現地見聞を中心に紹介したい。

- 一 ナショナル・トラストの他にもさまざまな保全活動
- 二 住民自ら都市環境を改善している現場から——都市研究センター
- 三 運河を蘇らそうと景観の改善をしている現場から——保全のボランティア
- 四 シビック・トラスト——環境保全の歴史と慈善運動
- 五 ナショナル・トラスト——国民の遺産を民間の手で維持・活用している保全団体
- 六 イギリスの社会に息づくボランティア

二——住民自ら都市環境を改善

市研究センター

綺麗にまとまった住宅街を外れると、古い高層の公営住宅が建ち並び、その奥には高速道路が走っている。人気が感じられない住宅地で、どこか暗いのは、早春の曇りがちなイギリスの気候のせいだけではなさそうだ。

ここはロンドンの西に位置する、ハマミス区（ハムステッド）の西に位置する、ハマミス区の中のノッティンゲールの町で、ロンドンの中でも暮らしの貧しい人々の住む住宅地であるという。この一画に、やはり古びた建物で、地域の集会所とも

写真—1 都市研究センター



いえる都市研究センターがある。

ストリート・ワークという、都市環境教育のプロジェクトで働き、このセンターでもボランティアとして活動しているアン・アームストロングさんが、説明してくれた。彼女は、当地ハマミス区の職員でもあった。

この建物は、ハローという上流社会の師弟校の卒業生が中心となっている慈善団体が、生活程度の低い地域での慈善活動や、基金による寄付を行っており、その活動の一環として、使用されてない校舎を、地域住民に貸し与えているものであるという。

センターの設立は一九七五年で、運営費はハロー基金、ロンドン教育庁、ハマミス区等から出ており、豊かな財源を持っているという。正規の職員は一人、他はパートタイマーやボランティアで、運営を手伝っている。

小さく区切られた各部屋には、タイプライター、印刷機、現像器具、電話あるいは図書などが置かれ、このような設備のない住民の役にも立っている。ここを利用する人は、地域の大人だけでなく、子供もおり、身の周りの問題や環境について考え、話し合い、必要があれば調査し、写真現像や印刷をやり、最後には展示をして報告会を催すことのできる場となっている。

子供も地域住民の一人として参加しているの、大人と同じように扱われ、発言をし、大人とも交流を深めている。小さな台所は、学校と違って好きな時に紅茶が飲め、重要なコミュニケーションの場となっているという。

子供たちが荒れた商店街を六週間かけて、大人へのインタビュ調査を行い、学校でもどうしたらよいか検討し、この都市研究センターで専門家の助言を得て、改善計画をまとめあげた。それが行政側に認められて実施に移され、商店街が蘇ったことがあるという。

また九歳の女の子のグループは、高層住宅に住む老人の生活を、ビデオに撮り報告した。そしてその老人が、殆んど戸外に出ていけないのに驚いた住民が、その後調査を行ったところ、七〇%の住民が、住宅の出入りに困難を感じていることが判明し、住民が話し合いを重ね、解決策として、住宅地の中にコミュニティセンターを造ることに至った例もあるという。

このように子供も大人も含めて、自分たちの問題として都市環境の研究・改善を行うことは、それがさらに、他人や他の地域のことを理解することにつながっていると考えているのだ。

また都市研究センターは、環境教育の場として学校などに利用されている。イ

ギリスでは近年、環境教育が重要視され、もっと地域社会の勉強を行うよう、指導されているが、学校側の人材やカリキュラムの制約から、指導するのが難しく、センター側でも努力を重ねた結果、現在多くの学校が環境教育の場として利用するようになった。

イギリスは全人口の八〇%が都市に住んでいるといわれ、住宅・老人・雇用・経済などの都市問題が年々増え、都市研究センターは、そのような背景の中から、住民がづくり出した組織といえるよう。

現在イングランドで四二のセンターがあり、所有も民間のもの公のもの双方あり、資金源も地方自治体、文部省、慈善団体と、さまざまである。

そしてイギリスの特色の一つと思われるのが、この政府や自治体の補助金の出し方である。もちろん、行政は独自の政策で都市問題の解決に当たっているが、民間の手で対処している慈善団体に対して、多額の補助金を出している。

一九八二年には環境省から、そのような慈善団体に五〇〇万ポンドが出され、また都市問題の啓蒙をしている団体にも補助金が出されている。

イギリスの環境省は、日本における建設省と環境庁を合わせたような機能をもち、都市計画、住宅建設、文化財保護、

国立公園、公害対策、水資源などあらゆる環境に責任を負っている。

一九八二年の、イギリス政府が各種の慈善団体に出した補助金総額は、一億五〇〇万ポンドにのぼっている。この三分の一以上が環境省から出ているのを見ると、かなりの比重を占めていることがわかる。

登録されている慈善団体だけで一千万以上あるという。ここに社会の大きな原動力としての、一つの活力が現われているように思う。

「こういった都市研究センターでは、都市計画の専門家のアドバイスが大切です。しかし、子供たちにああしろ、こうしろと言っているだけではない。意見を聞いて、それが不可能な時にだけアドバイスします。それに私の所属するハマスミス区は、理解があつてこういったレクチャーなどには、私を出させてくれます」。つなぎの作業服を着て机に腰かけた彼女は説明してくれた。

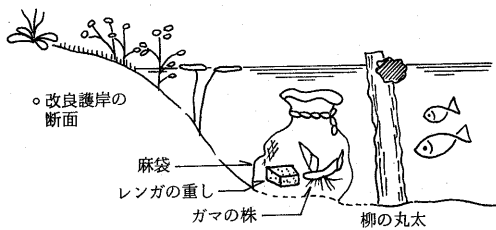
三 運河を蘇らそうと景観の改善をしている現場から 保全のボランティア

環境保全活動を行う慈善団体の一つにブリテッシュ・トラス・フォア・コンサベーション・ボランティアーズ(以下

BTCV)がある。この団体は、都市、農村の区別なく活動し、その内容も池や河の清掃、植樹、散策路の整備、自然の公園の建設並びに維持、貴重な動植物の保護と、多岐にわたっている。

一九五九年に会としての活動が始まり、会員は現在およそ五〇〇人、会員でない人にも活動を呼びかけている。ナショナル・トラスや地方自治体からの依頼が主で、年四〇〇件ほどの活動がある。資金は、自治体、企業、自然保護評議会などから出ている。しかしボランティアはまったく無報酬だという。依頼に対して作業員を募集する方法は、テレビ、ラジオ、ポスターなどで広告を出す。その費用は自治体や企業が出している

図一 湿生植物を植える護岸改良図



写真一 同作業中のボランティア



いう。

BTCVの活動現場の一つを、リージエント運河で見ることができた。ロンドンの中心から車で北へ一〇分ほど行くと、工場や倉庫の間を流れる運河に出合

う。このリージエント運河は、ロンドンの西から東へと流れ、リージエント・パークの中へと流れている。現場はパデントン駅の近くにあたり、水門のある下流部二〇〇mほどの範囲である。運河の幅は一五mくらいで、水は静かにゆっくりと動いていた。澄んではないが、ゴミや臭いもなくきれいな感じのところであった。近くには建設中の中層住宅があり、くたびれた工場群や古い運河と、不均合

な風景をつくっていた。

ロンドンの中心へ向かう地下鉄駅の近く、さほど安くはない分譲住宅の価格は、将来このあたりが住宅地へと変わっていくことを示しているようだ。

運河と道路の間にある敷地で、数人の男女が作業をしている。歩道に沿って丸太の垣根が回され、造成地の小山の斜面には、植えたばかりの樹々がある。

彼等はこの運河に、水生植物を植えて自然を蘇らせ、景観の向上を図ろうとするリージエント美化運動に協力するボランティアたちである。

麻袋にレンガの重しを入れて、ガマ・アシなどの湿生植物を入れて、袋の口を縄で軽く縛り、河岸の水中へ置くのだという。そして植物が浮遊しないように、柳の丸太をポルトで繋ぎ、水面に囲いを造っている。柳が腐る頃にはしっかりと植物は根をおろし、成長している。水鳥も来れるし巢もつくれる。そして岸辺には、柳、アイリス、ハッカ、セージなどの湿性の景観木や草花も植えている。そのためにも、コンクリートの岸の部分を年々壊して、土の部分を増していくという。

六、七年前は、運河の周囲は荒れていて、人が踏み込めなかったが、このカムデン区が少しずつ綺麗にしていき、河沿いには歩道をつけてきた。

だが一九八一年にロンドン都庁は、この一帯をロンドンの交通緩和のための、観光バスの駐車場用地として取得した。そこで美化運動グループは、このあたりは昔から、レクリエーションの場として利用されていたし、駐車場をつくっても便利ではないと主張し、自然の公園をつくって子供の勉強の場にしたほうがよいと提案をし、話し合いを続けていった。

その結果、都庁ではこの提案を認め、五〇万ポンドをかけて自然の公園の調査・計画・工事を始めたという。そして昨年B.T.C.V.に対して、周辺の住民から運河の調査依頼が出された。その報告に基づき、カムデン区は一万一〇〇〇ポンドを出して、運河の美化運動を進めることを決定した。その一環として、こうしてボランティアが作業している。

自然の公園の工事が終ると、都市研究センターがこの中できて、子供たちがロンドンの自然について勉強できるようにするという。

作業に来ている人は、新聞広告などで知ってやってきた。中には失業者もいるとのこと。彼等の作業は、あまり器用でないためか能率も悪く、慣れない手つきでボルトを締めている。特別楽しそうに作業するでもなく、黙々と、しかしゆっくりに考え作業を続けるボランティア

の人々を見て、イギリスの地道な慈善活動の一端を垣間見たように思えた。

「今後は、住民も少しずつ自然保護の運動に巻きこんでいきたい。都庁から派遣されているデザイナーは、駐車場のよいうなハードなもの造り方は心得ているけれども、自然の公園のようなものは手がけたことがないから困ります」と美化運動のリーダー（女性）は苦笑した。

四——シビック・トラスト——

環境保全の歴史と慈善運動

われわれはトラファルガー広場にほど近い貸ビルの一室にある、シビック・トラスト本部を訪ね、責任者のパーシバル氏に話を聞いた。

土地建物等を保有し、維持管理をしているナショナル・トラストとは違い、シビック・トラストは土地の所有は一切なく、人々の日常生活全般にわたる生活空間の改善に努力し、その水準の向上を目的としている団体である。

改善の対象となるものは、政府やナショナル・トラストが関知しない環境全般、小さなありふれた建物、街並み、小径、遺跡などにわたっている。

しかし職員はわずか二〇人、いったい何ができるかと思われるが、ここでは一

つひとつの問題を国民に訴えたり、アピールしていくことで国民が認識し、同時に政府や他の組織が問題に対処していくキッカケをつくるのである。運営費は多くの企業の寄付によっている。

シビック・トラストの設立は一九五七年で、その背景には一九〇〇年前後から現われた環境問題があげられる。一八世紀の後半から起きた産業革命により、イギリスでは大規模な囲い込み運動が農業に改革を迫り、共同利用地が極端に減少した。同時に都市への人口集中により、スラム化が進み、都市問題が大きく現われた。

こうした中で、共同利用地をレクリエーションの場として守って行こうとする共有地保存協会が、一八六五年に成立した。一八七七年には、古い建物が無意味に壊されたり改築されるのを防ぐことを目的とする、古建築物保存協会ができた。一八八二年には宮殿のような古記念物だけでなく、私有のものも保存する古記念物法ができた。その中には古代遺跡で有名なストーン・ヘンジも含まれたが、前世紀のものに限られていた。

一八八九年には、イギリスからスラムをなくし、美しい郊外をつくることを目的とした、都市と田園計画協会ができた。

一九〇九年には、初の都市計画法がで

きたが、イギリス全土をカバーするようなものではなく、その頃からさまざまな慈善団体が、環境問題に対して活動を始めていった。

一九一三年に古い城をアメリカに移築する計画が起きあがると、歴史的建造物保存の指定を広く適用せよ、という動きが活発化し、政府も自治体も保存に力を入れるようになり、一九三〇年地方自治体も古記念物に関する法律をもつようになる。

またイギリスの発展に伴い、美しい郊外が壊されていくことに反対して、一九二六年にイングランドの田園を守る評議会が成立する。

第二次大戦中より、国土を守っていかなければならないという考えが強くなり、一九四七年、何人も政府や地方自治体の許可なしには、国土を破壊したり造り変えてはならないという、都市田園アメニティー法が制定される。

戦後、多くの建造物が保存されるようになるが、一九〇〇年以後のものは含まれていなかった。しかしジョージアン王朝時代（一八世紀～一九世紀中頃）の建築物を守ろうとするジョージアン・グループと、ビクトリアン王朝時代（一九世紀中頃～二〇世紀初め）の建築物を守ろうとするビクトリアン・ソサイエティという、二つの協会が成立する。

一九五三年には歴史的建造物委員会が
でき、歴史的建造物に対して補助金を出
すようになり、一九六二年には地方自治
体も補助金を出すことになる。

その頃、住宅大臣、環境大臣の経験を
持つ国会議員のダンカンサンズを創立者
として、シビック・トラストができた。
そして国民に広く認められるようになって
たのは、街並み向上政策によるものだ。
それは戦後、荒れて汚く暗くなった繁

華街や商店街を、シビック・トラストが
店の所有者を集め協議し、建築家を雇っ
て明るく魅力的な楽しい商店街をつくっ
ていった運動で、その計画を映画館で流
したところ人々の関心と呼び政府の認め
るところとなって、次々と計画が成功
し、その数は四〇〇〜五〇〇カ所にのぼ
ったという。

またシビック・トラストでは、街並み
に調和した建築物をつくった建築家や、
建設業者などに毎年シビック・トラスト
賞を出している。同時に、地域のアメリ
カイ協会づくりにも力を入れている。

これは、町や村ごとの地域で、住民自
ら街並みを保存あるいは改善して、快適
な街づくりを行っていく組織で、シビッ
ク・トラストでは、協会づくりのための
本を出したり、相談があれば一緒に考え
ていくという。現在このような協会は、
全国で一〇〇〇カ所となり、会員は三〇

万人になっている。そしてすべて、ボラ
ンティア活動によって行われている。

一九六七年には、市民アメニティ法
に、重要な伝統的街並みは地域として完
全に守られる、という法律が加えられ、
保全地域の決定権は、市民に最も親しい
位置にある地方自治体に与えられた。こ
れは、ダンカンサンズが、古い大切な街
並みが壊されていくことを遺憾に思い、
立法化の努力をしてきたものが実現した
のである。

現在では、六〇〇〇の地域が指定され
ている。

ボランティアたちは、車が置かれる汚
ない小さな空地进行、駐車もできる草花の
咲く明るい空間に変えたり、古くみすぼ
らしくなった家々の壁を白く塗り直した
りして、地域の快適環境づくりに貢献し
ている。

またイギリスでは放棄された土地が多
く、その一つに人の通れなくなった小道
がゴミ捨て場と化していた。ボランティ
アたちが自治体へそのことを話しに行っ
ても、自治体の所有でないため応じても
らえず、自分たちで少しずつ綺麗にし
いき、海岸と商店街をつなぐ快適な小道
に造りかえた例もあるという。

地域の快適性向上につながるボランテ
ィア活動の意義が、このようなところに
あるような気がする。

図一-2 ファバシャムの街



現在シビック・トラストでは、地域ア
メニティ協会と協力して、地域民俗セン
ターづくりに力を入れている。これは、
地域社会の勉強がイギリスでは今まで教
育の中で行われてこなかったのを、環境
省の補助を受けてセンターをつくり、子
供たちが自分たちの住む地域の環境を、
理解し勉強できるようにしたもので、そ
の地域の歴史民俗や活動を展示したり、
スライドで見せたりしている。

このようなセンターは、一九七五年に
初めてつくられ、現在およそ二五カ所あ
るといふ。その中の一つファバシャムの
センターを訪ねることができた。

この町は小さな職人町で、建物の多く
は四〇〇年〜五〇〇年前のものだとい
う。とりたてて立派な建物があるわけ

もなく、こじんまりとして落ち着きのあ
る街である(図一-2)。センターの前通り
は歩行者天国となっていて、一〇年前に
地域アメニティ協会が提案して実現した
ものだからだ。通りの入口部分で車道幅
を狭め、歩道部に車止めのポールを設置
し、路面をレンガ色の簡易舗装にしただ
けの簡単なものであった。この通りを学
校帰りの子供たちが、連れだって談笑し
ながら歩いていく。街路に面した店の壁
は、小ざっぱりして他の店とも調和がと
れている。ゴミも落ちていない。

センターに入ると、ここは元バブだっ
たのをつくり変えたもので、地下には町
の人々が昔使用した職業機具や生活用品
が展示され、一、二階には昔の写真や建
物の模型が説明パネルと共にわかりやす
く配置されている。い
わば住民がつくった民
俗博物館なのである。

「シビック・トラスト
のセンターでは特別に
指導したりしない。あ
くまで地域の人々の自
発的な意欲を待ってい
るだけで、その際相談
されれば共に考え、あ
らゆる手段によって援
助していくだけであ
る。また成功したから